

「海の夫人」評論（承前）：論説

著者	佐久間，政一
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 6
ページ	1 - 1 7
発行年	1914-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/6405

『海の夫人』評論（承前）

教 授 佐 久 間 政 一

五

イブシの大海に對する憧憬と愛着とを最よく代表する此曲の女主人公エリーダは、諾威の外洋に臨む無人の地に、燈臺守の娘として生れたのであつた。其母は夙に狂疾を發して近き、乙女は其幼時を海風と怒濤との間に暮らしたのであるが、亡き母の面影を傳へて、豊かなる空想を有する情熱の人となつた。劇の始めには、エリーダは既に峽灣に沿へる一小市に中等の資産を有する開業醫ヴァンデルの後妻として、また二人の娘の繼母となつて現はれて來るけれど、此結婚に先立つて、エリーダは怪しき海上の人と、世にも不思議なる誓をなしたのであつた。初めは芬蘭フィンランドの生れの如く、後には米人のやうに思はれ、前にはフリーマンと唱へ、後ではジョンストンと稱する奇怪な船員は、行く秋の一日此ほとりの港に着いて、寂しき燈臺を音訪れたが、エリーダは一度彼に逢ふて物語るや、其神秘と幽遠と強烈な意力とを表徴する眼の爲めに、忽ち自らの意志の獨立を喪失して、不思議なる魔の力もて束縛されたやうに、全我を舉げて彼の前に屈伏しない譯には行かなかつた。エリーダは自ら其當時を叙して謂ふ。

エリーダ。（私達は）嵐の事、嵐なみの事に就いて話しました。海上の暗い夜、日の光のかどやく晴れた日の話
しなごもしましたが、一番多く話したのは鯨や海豚や、岩の上で日向ひなたぼつこする習慣のある海豹の事でした。それから鷗だの、鷺だの其他の海鳥の話をしました。ねえ。不思議ぢやありませんか、そんな

話をして居ましたら、あの男が海獣や海鳥があの人と親類のやうに思はれて來たのでした。
ヴァンデル、そして前前は？

エリーダ。私も矢張りそんな物と親類のやう思はれて參りました。

ヴァンデル。そうだらう。——それでその男と契約した譯だね？

エリーダ。約束しなければならぬと其人が申したのです。

ヴァンデル。ならない？それぢや前、自分の意志つてものはなかつたのかい？

エリーダ。其人が側に居る時は、なかつたのです。ねえ、あとになつて考へて見ると、自分ながら丸で譯が分らなかつたのです、

ヴァンデル。度々會つたのかね？

エリーダ。いゝね、度々ぢやありませんの。或日の事、その人が私達のところへ來て、燈臺の内を見物したのです。それで知り合ひになりました。其後折々會ひました。そのうちに船長に關係した厭な事件が起つて、あの人は旅立たなければならなかつたのです。

ヴァンデル。うん、もつと話して呉れ。

エリーダ。朝早くでした、日が出る頃に、——あの人が短かい手紙が來ました。其なかには、私にブラットハムメルまで來いと書いてありましたの。御承知でせう、燈臺とスキヨールドヴィクの間のあの岬の事です。

ヴァンデル。さう、さう、知つてゐるよ。

エリーダ。即刻来い、相談があると言書いてありました。

ヴァンゲル。で、お前行ったんだね？

エリーダ。ねえ行かない譯にいなかったのです、其時、船長は自分が殺したのだと云ひました。

ヴァンゲル、自分で云つたんだね！ あから様に云つてたんだね！

エリーダ。ねえ、然し自分では正しい立派な事をしたのだと申しました。

ヴァンゲル。正しい、立派な？ 殺した理由は？

エリーダ。それに就いては、何にも云はうとせませんでした。そんな事はわたしの耳に入れべき事ぢやないと言ひました。

ヴァンゲル。お前はたゞ其人の言葉で、信用して仕舞つたのだね？

エリーダ。ねえ、信用する外の考は起らなかったのです。それでも旅立なければいけないて申しました。

それで私に別れを告げようとした時、——あの人がどんな事を思ひ附いたか、とても貴方には想像が出來ますまい。

ヴァンゲル。それで？ どうしたか話して御覽。

エリーダ。衣套から鍵輪を出して、自分が始終はめて居た指輪を指から脱きました。それから私のはめて居た指輪を外づして、二つを一緒に鍵輪に貫したのです、そして私達二人は海と結婚しなければならぬいと申しました。

ヴァンゲル。結婚する？

エリーダ。ね、そう申しました。それから其指輪を通した鍵輪を、力一ばい、限し丈けの沖の水底へ投げ入れました。

ヴァンデル。で、エリーダ、前は？　　前も同意したのかい？

エリーダ。ね、其時には、私はこうしなくちやあならないと思ひましたの。――然し難有い事には――それであの人は立ち去つて仕舞ました。

ヴァンデル。それで其人が無事に行つて終つたからは？

エリーダ。あ、た解りになりませうが、私は間もなく本心に立ち返つて、何んて馬鹿げた無意味な事をしたんだらうと氣が着きました。

（主にボルヒ氏の獨譯に依る）――第二幕、第五場――

傳説に云ふところの『翺り行く和蘭人』を聯想させるやうな不思議な海上の人が立ち去つてから、エリーダは昏迷せる状態から目覺めて、初めて理性の冷靜と意志の獨立とを回復したのである。かくして乙女は自らの輕舉を悔いて、度々手紙を發して契約の解除を云ひ送つたけれど、海上の人は一切關知せざる如く、或はカリフォルニアより、或は支那より、最後にはアウストラリエンより書き寄せて、やがて彼女を迎ふべく來ることを約束したのであつた。

二人の娘と共に、妻に遺された醫師ヴァンデルは、此燈臺守の娘の素資を知悉することなくして後妻として迎へたのは此後の事であつた。エリーダも亦何等の熟慮をも經ることなく、只ヴァンデルの資産によつて生活の安易を得らるべき事のみを想見して、結婚したのであるが、初めは極めて幸福なる生活を経験し、間

もなく一男子を擧ぐるに至つたが、此頃から彼女の精神生活は著しい變調を呈して來たのである。間もなく幼児の死ぬるに至つて、此變調は愈甚しくなり、今や興奮と憂鬱と、焦燥と憧憬との間に彷徨往來するやうになつた。家庭の生活は草枯れ緑死した荒寥落莫たる冬の野のやうに思はれて來て、鉛のやうに重く、油のやうに滑らかな峽灣の水と、狭苦し息塞るやうな小港の自然は、徒らに局促と壓迫の感じを興へる種となつた。エリーダは今やスキョールドヴィクの岬頭に吹きよする蓬々たる海風と、目も遙かなる無涯のあなたよりうねり來る大洋の潮とを慕ひ初めたが、それと同時に夫の不思議なる海上の人の姿は、寢られぬ夜の幻に立つて、嘗つて別れし時さながらの、神秘と自由と威力とを具現したやうな眼を以つて、エリーダを諦視するのであつた。然しながら彼女は最早彼に對して何等の愛情をも有して居ないばかりでなく、此幻の出現は不安と恐怖とを愈深からしめたのであつた。彼女の健康は日に衰へ、其心的變調は益々甚しくなつたので、ヴァンデルは種々の救濟法を案出したが、凡てが徒勞に歸したのであつた。此時奇怪なる海の人は突如としてあらはれたのである。

彼は今や船員ではなくて、遊覽船の乗客として此町を訪ねて來たのであつて、最早昔のやうに眞珠の飾針を差した若々しい姿ではなくて、「薺々たる褐色の頭髮」と蓬々たる髯とを有する恐ろしげな旅客となつて現はれて來たのである。彼は米國に支那にまた濠洲に流離困頓の生活を経験したのである。彼はまた一諾威船の傭員となつて働ける間に、偶然にもエリーダの結婚を古新聞で知つたのであるが、爾來幾多の漂浪の旅を重ねたが、幸ひに再たび諾威の海岸を踏むことを得て、今や悠忽とし魔の來る如くに、直ちにヴァンデル家を探め出し、更にまた魔の如く此家の垣を跳過して、園内に立てるエリーダに近寄つて、直截に契約の履行

を要求したのである。彼は後れて来たヴァンゲルに向つて云つた。エリッダは報告です。前日、エリッダの報告に
軍他國の人。指輪の二件は効力を有するもので、結婚と同一の意味である事は、エリッダも私も一致した處
の論議です。この點は、問題として、エリッダの報告に於いて、エリッダの報告に於いて、エリッダの報告に
おきかたがた、いまだ、未聞きなさい、私は不同意です。もう私は貴方に何等の關係もありたくはないので
あります。そんなに私を睨まないで下さい。私は不同意だときつぱり、申しします。この點は、問題として、
ヴァンゲル。貴方は狂人に違ひない、こゝへ來てそんな兒戯に均しい事件の上に或る權利を設定するは、
了もとは、この點は、問題として、

で他國の人。御尤だ。貴方の考へるような意味での權利は、全然持つて居ません。この點は、問題として、
不変の點は、問題として、貴方の考へるような意味での權利は、全然持つて居ません。この點は、問題として、
るの、れまい。妻の意志に反しては、問題として、貴方の考へるような意味での權利は、全然持つて居ません。
立他國の人。さうです。そんな事をして何の益に立ちます。もしエリッダが私と共に去らうとするなら、自
分の意志によつて旅立なければならぬのです。

エリッダ。(驚いて叫ぶ) 自分の意志で、問題として、貴方の考へるような意味での權利は、全然持つて居ません。
ヴァンゲル。そんな事が貴方には信じられるのですか？ 問題として、貴方の考へるような意味での權利は、全然持つて居ません。

エリッダ。(獨り言ふ) 自分の意志で、問題として、貴方の考へるような意味での權利は、全然持つて居ません。
ヴァンゲル。貴方は發狂して居るに相違ない。歸つて呉れ給へ。われわれは貴方にはもう用はないのです。
他國の人。(時計を見て) もう船へ歸る時間だ。(一歩進み) エリッダ。私はこれで義務を果たしたのだ。

「や、尙ほ近づき」約束した事を守つたのだ。

エリーダ。(願ふやうに、側へ退き) あゝ、私に觸らないで。

他國の人。明晩まで熟考するがよい。

ヴァンデル。何も熟考する事は無い、さあ出て行き給へ。

他國の人。(なほエリーダに向つて) 漁船でこれから峽灣を上るのだが、明日の晩また歸つて來ます。其時
おちちへやつて來るから、此庭の内で待つて居て呉れなくちやいけません。私は貴女一人丈けと事件の
結着を附けたいのだ、解かましたか？

「自由の意志から」と云つた海上の人の言葉は、エリーダにとつては、長き眠より呼びさますべき曉の鐘であつた。今や彼女は從來の混沌ヒヤウスから救はれて、明確澄徹る自覺の域に甦よみがへらされたのである。顧みてヴァンデルの結婚を思へば、正しくこれ境涯によつて制御された結合であつて、そこに自由意志の選擇がなく、そこは相互の理解もなかつた單なる傳襲的實利的な共棲であり結合である事を發見した。かるが故にかゝる虚偽なる結合——エリーダ自らの謂ふ處の賣買的結婚を帳消して、新らに鮮かな自覺と、自由なる意志に據つて支配するべき新生涯に入らうと決心した。かの海上の人に對しても、夫の意志と權利とから全然獨立した絶對自由の人となつて、解答を與へなければならぬと心を決したのである。此の故にエリーダは離婚を要求した。ヴァンデルは大に驚いていろいろに宥めなければならぬとエリーダは其要請を枉げなかつた。再び海の人であらば、最後の決定を逼つた時、そしてヴァンデルが彼を脅かすに、嘗つての重罪犯を以てして、飽くまでも妻を抑留しようとした時エリーダは謂つた。

エリーダ。貴方！私にこの事を申さして下さい——この方も聞いて居ますから。（良人に）貴方は私をこゝへ引留めて置く事が出来ます。貴方は其權力と手段とをもちます！また貴方はさうなさいませう！然し私の精神——すべての私の思想——あらゆる私の憧れと望みを、貴方が縛り付けて置く事は出来ません。こう云ふものは、——その爲めに私が生れて、——それをあなたが私に拒んだもの、或るか或る知られないものの方へ急いで行き、飛んで行きます！

ヴァンデル。（内心の苦しみを以て）エリーダ、お前は一步一步私から離れて行くのが、よく解る、或限らないもの、或廣漠なものに憧れるお前の望——到達難しいものを慕ふお前の望は、到頭お前の心を暗い夜のうちにに入れて仕舞ふのだ。

エリーダ。あゝ、そうです、そうです——私は頭の上に、黒い、音のない翼のようなものを感じて居ます。ヴァンデル。さうなつちやあいかん。お前を救ふ道は外にはないのだ。少くとも私にはない。だから——だから私は即座にこゝで取引を帳消するよ——今はお前は自分の道を選んでよい——十分な——十分な自由で。

エリーダ。（無言にて暫らく彼を凝視す）それは本當ですか——本當ですか——貴方の仰つた事は？。それを貴方の心の底から仰しやるのですか？

ヴァンデル。さうだ、深い苦しい心の底からさう云ふのだ。

エリーダ。貴方にもそれが出来ますか？。そんな事が出来ますか？

ヴァンデル。うん、出来る。お前を深く愛するから出来るのだ。

エリーダ。(低く、そして震へながら)それほどまで近く、それほどまで近く、私は貴方になつて居たのでせうか知ら!

ヴァンゲル。年月と共に棲とが、それを生じたのだ。

エリーダ。(手を握り合せて)そして私は——私はそれを知らなかつた!

ヴァンゲル。お前の考は別の道を取つて居たのだ、然し今ぢやあ——今ぢやあお前は完全にわたしと私のものから離れたのだ。そして私の家族からも離れたのだ。今こそお前の自分のまた本當の生活が——再び眞の道に歸れるのだ。お前は自由に選擇して宜い、そして自分の責任でもつて。

エリーダ。(頭を抑へ、ヴァンゲルをぢつと見て)自由にそして——そして自己の責任でもつて! 責任もですか? ——ここに——變化の力があるのです。

(汽船のベルの音又聞ゆ)。

他國の人。そら、エリーダ! あれが最後のベルだ、ぢやあお出でなさい!

エリーダ。(彼の方を振り向き、其顔を凝視し、力の籠つた聲で云ふ)かう云ふ風になつた後では、私は決して一緒に行きません、

他國の人。一緒に行かない?

エリーダ。(ヴァンゲルに寄り添ひ)かうなつた上は、私は決して貴方に離れません。

ヴァンゲル。エリーダ——エリーダ!

他國の人。ぢやあそれで終ひか?

エリーダ。わつ、いつまでもこれで終ひです。

他國の人。解つた、ここには私の意志より強いものがある。

エリーダ。貴方の意志は、今では私に向つては少しの力もありません。私には貴方は死んだ人です——海から上つて来て、また海へ歸る死んだ人です——然し私はもう貴方に對して少しの恐怖もありません。それに私の心を拐^{かど}すものは全くなつて仕舞ひました。

他國の人。左様なら、ヴァンデル夫人。(彼は垣を跳り越へる)これからは貴方は私にとつては何物でもありません——わたしの生涯に於ける命をとりとめた一つの難破^{シッフル}に過ぎないのです。(左手へ去る)

かくして、幾多の悲劇を産み出した此北歐の詩人の手は、珍らしくも調和と歡喜とに終る戯曲を創造した。今やエリーダは、意志の自由なる選擇と、自己責任の自覺との下に、ヴァンデル夫人として、また二人の娘の繼母としての眞の生涯に入るのである。曲中の畫家バルレストッドが描いた女人魚^{にんぎょ}は、一たび大海の潮に離れると、狹灣の岩間に打ち寄せられると死んで仕舞つたけれど、人としての「海の婦人」は自由と自己の責任とによつて陸地に同化する事が出來た譯である。

六

然しながらわれ等はまづ、此圓滿なる解決が、果して心理的必然の法則に遵據して居るかどうか、或はまた意志の自由と、自己責任の感と云ふ二個の命題が、焦燥し憧憬し摸索し懊惱して居たエリーダの混沌たる心的状態を一掃して、平和と歡喜との光明界に導き入るべき力があるかどうかを考察しなくてはならない。

『イブセンの世界觀』の著者マルコヴツイツは論じて謂ふ、エリーダには初めより束縛と抑壓とを擺脫した
或物にあくがれる心があつた。然しながら眞の自由フライハイ、チユルローレツベカイと放フツ態テとを識別する事が出来なかつた。――
従つて著者は海上の人を以て放恣のジムボールと見倣して居るが。――そして此理解の混沌から彼女を救ひ
出したのは、實にヴァンゲル其人に外ならない、即ちエリーダは夫の獻身的な愛によつて、眞に自由に導か
れたのである、正しき意味に於ける愛の何たるかを躰得したのである。ヴァンゲルもまた其捉はれたる人生
觀から、妻の吹息によつて眞の結婚の何たるかを了解し得るに至つた。即ち彼等は一切の古き形式から、愛
によつて解放され向上させられたのである。彼等はかくして謂ふ所の『第三帝國』の門戸を開くべき鍵鑰を
握り得たものであると。此説に従ふには、まづ此解決のプロセスが完全であり自然であると云ふ事を前提し
なければならぬけれど、私はむしろその反對を考へつゝ居るものである。

テオドル・フォンターチが、伯林での此曲の上場を見た後で『エリーダは憧憬病に罹つて居た。海と海の
人々に對する憧憬病にである。自由は彼女を癒した。然しながらそれは私にはあまりに手早く經過した』と
云つた批評は、明かに此心的轉向があまりに皮相で不自然な事を指摘したものであるまいか。ズルトハウ
プトは其戯曲評論』に於てエリーダを以て、強度の『ヒステリー』となし、其病的特徴が悉くヒステリーの症狀
に合する所以を擧げて、假令かゝる治癒があるとしても、極めて一時的なものであることを痛論して居る。(同
書第四卷、百七十二―百七十四頁)。エリーダがヒステリーであつたか、どうかは姑らく措くけれど、少く
とも其心的變調が懷胎の時期に濫觴した事(ヘッダ・ガブラーにも此期の心理的變調が若干のモタイグイール
シクをなして居る事を記憶しなければならぬ)並びに其後に於ける思想と情調生活の甚しく動搖して居た事

などから推して——そして不思議な幻視や錯覺のあつた事も思ひ合せて、——エリーダは心的に健全な人物であるとは云はれない。由來イブセンは好んで病理學的に取扱はるべき人物を用ゐて居るけれど、かゝる性格を藝術上の材料として根據することが、それが或點に於て人心の最奥に横はる靈的生活の或ものを、——即ち普通の生活ではほとんど明らかに認識されることが出來ぬ或ものを——啓示し表現し、強度に顯揚する或けの範圍と程度とで以て行はれるなら拒否すべきものではないが、（—ストリンドベルヒの作物に見るような—）或一個の健全なる道德律の決定を、この材料より論結しようとするが如きは頗危険なものであらう。此場合に當て箴めて云ふと、自由と云ふ一大警語が、よしエリーダの心境の混亂を淨化し得たとしても、これを以て直ちに健全な普通人に用ゐて最有効なる、靈藥であると擴推するにはまだ若干の距離を経た上でなければならぬ。ブルトハウプトがエリーダを目して、

“Elide Wangel ist kein freies, gesundes Menschenbild, an dem ein beweiskräftiges Experiment über die Heilkraft der Freiheit angestellt werden könnte, denn sie ist eine schwachranke erblich belastete Frau”

と云つたのは、一指直ちに此曲の病所を差すものと云はれやう。

エリーダはまた自らの結婚を以て、自由意志の撰擇なき買はれた結婚だと謂つて居るが、これもブルトハウプトの論じたやうに、明晰な論理的意識を缺いて居るのではあるまいか。自由な撰擇を経ないと云ふ事と、強制されたと云ふ事は、其間自らなる區別がある。強制された上は、自由の撰擇のなかつたのは云ふまでもない事ではある、さりながら自由の撰擇しなかつた事が、直ちに強制だと云はれまい。之をエリーダが結婚

した當時の事情に徴して見ても、何等の強壓的な外的權威も存在しなかつたのではないか。もし或廣い意味に於ての強制があつたとしたら、それは彼女の生活狀態の壓迫であるだらうが、自己の生活に資すべき材料を、いかなる手段に仰ぐべきかは、懸つて個人の考へに存するもので、若し生活上の便宜と功利との爲めに、思はぬ方向に自己を枉げたとしたならば、其責は自らが甘んじて受くべきもので、他に嫁すべき性質のものではない、エリーダは蓋し、於便宜な、於都合よき生活を送らんがために、茫漠としてヴァンデルと結婚したのであらうが、それにしては、かゝる覺醒に續いて來るべき過去の自らの行爲に對する痛恨と非難と叱責とが缺けて居る。即ち内に向ふべき針の尖端が、不正當にも外部にばかり向つて居る傾きが明らかに見えて居る。凄慘な自己葛藤が缺けて居る。かう云ふ點から見ても、よし百歩を譲つて、エリーダが健康な精神を有して居ると假定したとて、彼女の自覺が透徹した種類のものではなく、皮相な淺膚な、出來心に似た性質のものであつたと云はねばなるまい。従つてかうした薄い淺い自覺を基礎として得たあの解決が、またあの心的淨化が、頗る一時的調和的なものであつて、永遠の力に缺けて居るから、やがては更に強力な徹底的な自覺が——根本的意味に於ての心的革命が起らなければならない。そして斯うした革命が襲うて來つた時には曩に一時的な解決が、忽ちにして破棄され掃蕩されて、より甚しい焦燥と懊惱とに陥るべき運命が示され居ない云へようか。

更らにまたヴァンデルが「心の底から」興へたと自ら稱する自由の宣言が、まことに熾熱なる愛情から生れた犠牲的精神から、崇高な壯大な自己克服の意志から出て來たものであるか、ごうか。ヴァンデルは素より極めて善良な人物ではあるけれど、また極めて平凡無味なる性格であつた。彼が人生に對する何等の洞察を

も有してゐなかつた事は、其棲數年にしてなほエリーダの心的傾向をほとんど理解し得なかつた事でも解るではない乎。而してまた彼が人生の眞摯にして嚴格な問題を、その怯懦な心を以て、つとめて忌避してゐた事は、結婚の當時に於て、嘗つて約した人のあることをエリーダから自白されながら、其關係を究め其顛末を明らかにしなかつた一事でも明瞭ではない乎。重苦しい家庭の空氣のうちにあつても、彼は自己の生活の一隅に潜居して、萬事を行くがまゝに任して、苟も嚴肅な問題に觸れようとしなかつたのは正しく彼の敢爲と果斷とに缺如する病所をしめすべき好個の證據ではあるまい乎。彼のやうな姑息にして退嬰的な、因循にして妥協的な人物が、コクロヴィツチの謂ふ所の妻の自由の吹息に觸れて廓然と大に悟るところがあつて、自己犠牲の勇猛心を喚び起して、愛する人を眞の生活に送らうが爲めに、悲壯にして沈痛な斷念に到達したとするなら、ヴェルネルの評したやうにエリーダの急速な心的變轉より、更に「大きな一個の奇蹟」ではあらう。されば彼が自ら稱して「心の底から」と云つた自由の宣言は寧ろ彼が一時の權宜によつた冒險な最終の試みであつたと思はれる。されば一方エリーダが無理強ひに彼を強要したのと、も一つは彼が後になつて、『生死の境に臨んでは、吾々醫師は随分冒險をするものだ』と云つた言葉などでも理解される。即ちヴァンゲルはより確實にエリーダを自己の下に拘束せんがために、眞の解放を銜つたのではあるまい乎。斯う見て來ると『海の夫人』にあらはれた問題の價值如何は別として、問題のために問題を作り、解決のために解決をなしたやうな、眞の意味に於ける人間味に乏しい、其足が直ちに深奥な人間の問題の上に觸れ居ない皮相な薄弱な作物に過ぎないと斷定される。イブセンの『第三帝國』に對する理想については、敢へてこゝに論じないけれども、かゝる壯大な理想の一部を顯揚すべくエリーダもヴァンゲルも生れたものとするならば、私は其あまり

に虚弱にしてまた不聰明なることを悲しまざるを得ないのである。

然しながら、多くの批評家が云ふように『海の夫人』は『ノラ』に始まつた婦人問題に對する最後の斷案であると思ふべきものであらう乎。イブセンは、自由の選擇と、自己責任と云ふ二個の警語を以て、第三帝國の結婚と云ふ門戸を開くべく十分な鍵であると考へたのであらう歟。われわれはこゝに不思議な報告を有してゐる。イブセン全集の獨譯者バウル、シュレンテルの傳へる處によると、此戯曲の出る少し前に、イブセン心酔の或人が『今度の作は幸福に終ると云ふ噂であるが、實際どうであるか』と訊ねた時、イブセンは甚ずるさうに微笑して、暫らく沈黙して居たが『いや悪い事がなくて收まりもしませんよ』と答へた相である。私には此『悪い事』と云ふ言葉が、果して何を意味してゐたか知らないけれど、更にわれわれはそれらしい推測を許さるべき或材料を有するのである。

『海の夫人』に後るゝ事四年、即ち千八百九十二年に同じ詩人によつて公にされた『建築師ゾルネス』(Baumeister Solness (獨) The master Builder (英) のうちには、エリーダの二人の繼娘のうち、其性格に於て繼母と多くの類似を有するヒルデが、再び現はれて来る。若しエリーダの心的轉向にして永遠に堅實であつたなら、其新らたに得た人生觀にして、眞に深奥なまた痛切なものであるならば、或はまたヴァンデルが示した犠牲的の勇氣が、妻に對する十分な理解と、人生に向つた確かなる洞察とから生れたものであるならば、此二人に依つて建設された家庭は、謂ふ所の第三帝國に於ける至福圓滿な生活であつて、かゝる零圍氣のうちに人となつたヒルデには、新しい生活を顯揚して、眞の人生を啓示すべき或物を有さなければならぬ筈である。然るにヒルデは其家庭を『鳥や籠』に譬へたのである。拘束と羈絆との裡にあつて、自由を愉悅し夢想

して居たと自ら云つてゐるではないか。そしてまたわれらがヒルデの性格を檢する時に、新しい家庭の人としての精神的感化に就いては、ほとんど何物も索める事が出来ないのである。

然らばイブセンが此戯曲に於て企圖したところは那邊に存じてゐるであらうか乎。新しい生活の意義を顯揚するには、其願使した人物があまりに弱かつた。彼等をして築かした新なる建築は間もなく基底より搖らぎ初めた。解決は解決ではなくて、建設はまた建設ではなかつた。私は此曲の見方に於て、大部分の——私の讀んだ範圍に於けるすべてのイブセン註釋者の意見に反對する。『海の夫人』の論者の云ふやうな『第三帝國』の結婚てふ門戸を開くべき鍵鑰を與へたものでもなければ、關與した二人の靈的向上の徑路を示したものでもない。私が此戯曲の背後にありありと眺め得るのは、眞理の爲めの不斷の猛闘に憊れた、四十年の破邪顯正の戦にやつれた麁々たる白髮の一老師の姿である。其眼にはなほ努力の光が輝いても居よう、其足にはなほ千里を孤往する力が残つても居やう。然しながら一代を通して嘗めた幾多の苦々しい經驗は今や人生の根本的改造に對する或斷念を浮レジテツイオンばせて來た。自覺と見たものも多くは自瞞にすぎないし、更改と見たものも概ね妥協に外ならぬのである。徹底した生の更改は云ふべくして望まれない。六十才の年を迎へたイブセンは、其勇猛な心のうちにかうした悲哀を感じたのであるまいか。此間の消息をまた唆示するものとして見るときに『海の夫人』は更にまた或種の興味を與へるものである。されば此次ぎに生れたヘツダ・ガブラーには、再び青春時代の鋭さがあらはれてゐるけれど、『建築師』に至つては、既に全勞作の終曲エビローグを編み出すべき時は來たので、こゝから彼の『懺悔錄』コンフエシヨンは初まるのである。珍らしくも調和と歡喜とに終つたと見る此篇のうしろには、實はかうした人生に對する哀愁と失望とが潜んで居ると考へるときに、われらは

云ひしらの哀感に打たれずには居ないのである。(未完)

(拾二月七日夜)

附。五、六、に用ゐた参考書類

Buthaupt : Dramaturgie des Schauspiels. IV (1905)

Dr. Schlag : Das Drama (1909)

Markowitz : Ibsens Weltanschauung. (1913)

ワイマルの秋

教授 西澤 富則

近代獨逸の精神をまのあたり觀んと欲する者は、日曜日の午前に、ベルリンなる遊就館(武器庫)に行つて見る必要がある。ベルリンの巧みに陳列せられた、豊富なる藝術品の聖場を訪づれる人は、曉天に於ける星辰の如く稀であつても、遊就館内ばかりは、陸續として押し寄せ來る看客の雜沓に、身動きも取れぬ位である。古き世の精華を輯めたる藝術の殿堂には、半時間にたつた一人の賞歡者の杖を曳くものもない。エラスケスの『ポロオ將軍』の前、さては、レムブランドが『ダニエルの幻影』の前には、一時間に一人位の割合で、たゞぼんやりと、當面の繪畫を凝視する有難い看客が、杲然と佇立してゐるのを見受けるに過ぎぬ。

しかし乍ら、獨逸や、プロシャの所謂英雄の巨大な石膏像が、劍と楯を持つて立つ所、分捕つた軍旗が幾旒となく一緒に懸け列ねられてある所(皆廿旒以上づゝ、一緒に懸けてある)鹵獲した大砲小銃が、數百千門、數をつくして立て並べられてゐる所、それから、熱烈な愛國心に満ちた看客の眼裡に、慘憺たる惡戰、苦